

Title	リカアドオ著作及び手稿の発見
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.6 (1933. 6) ,p.853(71)- 858(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19330601-0071
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に起因すると云はねばならないのである。(p. 164.) 斯くてこの交易こそ人類の生活水準を物的にも神的にも高めるに與つて力ありしものとロオズは結ぶ。(p. 176.)

大略以上の構想を持つ本書に對して、その特徴を本稿の初めに掲げて置いたからには、茲に評言を加へる要を見ないであらう。謂ゆる内海文明に關する簡單な参考書の一として擧げらるべき價值を本書が有することは確かであると云はねばならない。

リカアドオ著作及び手稿の發見

小 泉 信 三

Minor Papers on the Currency Question 1809-1823. By David Ricardo. Edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander. Baltimore the Johns Hopkins Press. 1932. pp. IX, 231.

久しく埋没を悔まれてゐたりカアドオの「マルサス經濟原論評註」の原稿が發見せられ、公刊せられて學者の多年の渴望を滿たしたのは數年前の事であつたが、(Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" By David Ricardo. Edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander and T. E. Gregory, 1923.) 今又同じホランドア氏に依て、同じリカアドオ文書から上記の書が校訂編纂せられたことはリカアドオ研究者に取つて慶賀すべき出来事である。リカアドオ文書發見の顛末は、前記マルサス評註の緒論に記されてゐるが其を見てない讀者の爲めに念の爲め記せば、此文書は「デギッド・リカアドオの曾孫で、今英國ハンプシャー州のクライストチャアチに住むフランク・リカアドオ(Frank Ricardo of Bure Homage, Christchurch, Hants.)が偶然其物置に發見して之をホランドアの手に附したものである。其のホ氏宛書簡の一節を轉載すれば左の通りである。

「一九一九年の秋、或は春なりしやも知れず」なりしと覺ゆ、予はプロオムス・ベロウ(Bromesberrow)の宅の物置

に貯へられたる家具を吟味しつゝある中に褐色の紙を以て包み、若干の古裝飾品と共に不注意に或函の中に仕舞ひ込んであつた此手稿に逢着した。予はそれをデギッド・リカードオの自筆手稿なることを認めたが、それが既に公刊せられたものであるか否かは當時まだ承知しなかつた(Notes on Malthus, p. XI).

今日上掲の標題を以て發表せらるゝリカードオ文書も右の「マルサス評註」と共に發見せられたものである。此に「通貨問題手稿」と名づけたのは、其處に取り扱はれる主なる問題から見て此標題が適してゐると思つたからだと校訂者は斷つてゐる。此書のリカードオ資料としての價值を知る爲めには無論其内容を見なければならぬ。今煩を厭はず之を列記すること左の如し。

- I. Notes on Locke's "Raising the Value of Money" (1695)
- II. Notes on Stewart's "Principles of Political Oeconomy" (1767)
- III. Notes on Smith's "Wealth of Nations" (1776)
- IV. Notes on Thornton's "Paper Credit" (1802)
- V. Notes on Liverpool's "Coins of the Realm" (1805)
- VI. Letter to Francis Horner (February 5, 1810)
- VII. Notes on the "Bullion Report" (1810)
- VIII. Letter to the Morning Chronicle on "Bullion Report" (September 6, 1810)
- IX. Letter to the Morning Chronicle on Sinclair's "Observations" (September 18, 1810)
- X. Letter to the Morning Chronicle on Randle Jackson's "Bank Speech" (September 24, 1810)

- XI. Notes on Trotter's "Currency and Exchanges" (1810)
- XII. Notes on Vansittart's "Propositions respecting Money, Bullion and Exchanges" (1811)
- XIII. Notes on Garnier's "Monetary System of Ancient Rome" (1817)
- XIV. Ricardo and Torrens on "The Measure of Value" (1818)
- XV. Notes on Copleton's "Second Letter to Peel" (1819)
- XVI. Reply of Blake to Ricardo's notes on "Expenditure of Government" (1823)
- XVII. Notes on "Plan of a National Bank" (1823)
- XVIII. Correspondence, A: Say-Ricardo; B: Condy Rague; C: James Mill; D: J. L. Mallet; E.: Joseph Pinsent; F: Hutches Trower; G: J. R. McCulloch
- XIX. Varia, A. "Commonplace Books"; B: "Principles of Political Economy"; C: Corn Law; D: J. S. Mill; E: Rutherford's "Hints"; F: American Currency; G: National Debt.

右の内容を見て第一に指摘すべきは、リカードオの生前公表の文章で今日まで全然記載に漏れ、誰れも知らずにあつたことである。それは上記VIII, IX, X, として掲げた、彼れのモニングクロニクル紙への寄書である。リカードオが此新聞紙へ、一八〇九年八月二十九日「金の價格」と題した寄書を掲げ、其に對する批評を反駁する爲め更に九月二十日と十一月二十三日とに寄書したことは今日誰れも知つてゐるし、ホランダアの手で其複刻本も出來てゐるが、彼れが翌年の九月に地金委員會(Bullion Committee)の報告に就いて三回寄書したことは、或はリカードオの兄弟の一人が書いたと推定されてゐる一八二四年度の Annual Biography and Obituary に於けるリカ

アドオ傳にも、マカロックの「リカアドオ氏の生涯及び著作」にも記載なく今日迄全く傳へられてゐなかつたのである。此等の傳記者が何故に此寄稿の事を一言もしなかつたか其理由は明瞭でないが、何れにしてもリカアドオ文書の中には寄稿の切り抜きが其と記して保存せられ、それが彼の「金の價格」と同じくRと署名せられてゐるのみならず、其内容文章から見てリカアドオのものであること疑ないのである(P. 62)。リカアドオは言ふ迄もなく地金報告を賞讃し、其攻撃者に對して之を辯護する者であることは、彼のボサンケット反駁を見ても明である。九月六日の寄書の中でも、彼は「地金委員は紙幣發行の其に基づいて調節せらるべき諸原理を最も適切に解明した。而して予は吾々が久しく幻想に支配せられ、最も明白なる經濟學原理に無識なることを以て著名なる商人等の一會社をして社會の大部分の財産の價值を恣まに左右せしめたることを驚きを以て回顧する日の遠からざることを確信する」と言つて居る(P. 64)。他の二の寄書は何れも夫々シンクレア及びランドル・ジャックソンの非難に對して地金報告の爲めに辯じたものである。此寄書が再び發見せられたのでリカアドオの文筆活動の終始が明になつた。從來吾々の知る限りに於ては、彼は一八〇九年の八月―十一月に「金の價格」といふ問題に就いて寄書し、翌年早々(序文日付は前年十二月一日)小冊子「地金の騰貴」(High Price of Bullion)を出し、更に一八一一年に至つて地金報告を攻撃した「ボサンケットに答ふる書」(Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations etc.)を著したが、此中間にリカアドオは喧々囂々たる地金問題論争に就いては何も公に發言しなかつたものであるか否か、學者は些か惑ふ所なきを得なかつたのであるが、其間の消息がこれで明になつた。彼の傳記も著作目録も些細ながら訂正を要するところになつたのである。

次に Notes としてあるのは、リカアドオが書を読んで作つた覺書及び評註で、長短粗密様々であるが、彼れが

熱心なる讀書家であつたことがこれで分る。但し此のノートの粗密は其時々々の必要、事情に由つたものであるから、必しも彼れが重要視した書籍に就いて細密な覺書を作成したといふ譯ではないやうである。國富論の如きは無論熟讀したに相違ない筈だが、本書に見える限りでは其ノートは極めて簡略なものである。ホランダは一々のノートの前に評註の的となる書籍に就いて註解を與へてゐる。同時に此等のノートに依てリカアドオの讀書の範圍が明になる。通説によれば、リカアドオは讀書に依て學ぶことの少なかつた人とされて居り、筆者の如きも同趣旨の事を書いたことがある。併しホランダは今回の文書に由て見るとリカアドオは從來想像せられてゐたよりも遙に多く經濟書を読んでゐるから「此傳説は訂正」せられねばならぬと謂つてゐる(P. 11)。勿論多い少ないは比較の問題であつて、リカアドオが一般的に學者としては決して博渉家に屬するものでないことは依然として變らないが、本書に於てリカアドオの綿密熱心な讀書家としての一面が示されたことは事實である。ノートの中ではその地金報告に對するもの(斷片と鑑定せらる)トルレンスのリカアドオ批評に對するもの、如きは殊に興味がある。後者に於ては、リカアドオはトルレンス(Torrens)が The Edinburgh Magazine and Literary Miscellany 一八一八年十月號に「リカアドオ氏の交換價值學說批難」を掲げて、アダム・スミスが勞働費用が諸貨物交換價值の尺度たるは生産に資本の參加する以前に限るとしたのは正當で、其から離れたリカアドオは誤つたと批評したのに對して、リカアドオはトルレンスのと自著の文言の拔萃とを並記して、トルレンスの謂ふところは正に彼れ自身が其本文に於て留保を設けた點であることを示さんとしてゐる。此のリカアドオの立場は既に其のマカロック宛書簡に見えてゐるが(一八一八年十一月二十四日附)、今回のノートは其を補ふて價值あるものである。

最後に書簡に就いて云へば、リカアドオ宛て發信者の名は目次に掲記された通りであるが、其中に一つリカアド

オ自身の書簡がある。それは一八二二年三月三日附ジャン・バチスト・セエに與へたもので、これは從來はセエの往復書簡集中("Mélange et Correspondance d'Economie Politique de J. B. Say" Paris 1833)に其佛譯文のみが掲げられてゐたものであるが、其原文全文が發表されたのは今回が始めてである(其摘要はジェエムス・ボナアの作つたものが彼れの編纂に係るマルサス宛てリカアドオ書簡集に掲げられた)。

「通貨問題に關する短篇手稿」は凡そ上述の如き内容を有するものである。固より前年發表の「マルサス評註」ほどの價值を持つものではないが、而かも猶ほそれがリカアドオの生涯及び其著作に關する記述の或缺陷を補ふに足るものであることは疑ない。彼れの新聞寄稿の從來全く傳記者に依て傳へられなかつたものが、而かも三篇迄其死後一世紀を経て始めて発見せられ、考定せられたことの如きは校訂者の爲めに深く慶賀せざるを得ない。「マルサス評註」の如く其原稿の存在したことが明かで而して見失はれたものを発見したことは無論愉快であらうが、此度の寄書に如く、從來全く知られざりし著作を新たに発見したことも亦た別様の愉快を感じしむるに相違ない。リカアドオ研究者に取つては久しく「マルサス評註」の手稿とリカアドオのジェエムス・ミル宛て書簡とが二つの大なる缺乏であつたが、その一は既に前年に満たされ、更に其以外に豫期の收穫も今回公にせられた譯である。残る一つものは遂に失はれたものとして終るや否や。吾々は探索者の爲めに切に其好運を祈らざるを得ないのである。

最近經濟文獻

(昭和八年五月二十日調)

【理論經濟學】

- *經濟原論 高田保馬著 菊判 日本評論社
- *社會經濟原論 園田實著 菊判 丸善仙臺支店
- *經濟學教程 レオンチエフ著 小原次郎譯 四六判 希望閣
- *資本論註解(第二卷) ローゼンベルグ著 淡徳三郎・直井武夫共譯 四六判 改造社
- *常識經濟讀本 高橋渡著 四六判 南光社
- *ケインズ貨幣論(第三分冊、價格水準の動態) 四六判 鬼頭仁三郎譯 菊判 同文館
- 經濟理論と經濟社會學(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、七九—一〇〇頁) 中山伊知郎
- 資本主義經濟機構に於ける價格の職能(國家學會雜誌、四七卷四號、昭和八・四、三八—五九頁) 土方成美
- 生活經濟價值序論(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、五一—七八頁) 宮田喜代藏
- 價值と經濟的ディメンション・ゴットルの價值論—(三田學會雜誌、二七卷五號、二七—七四頁) 氣賀健三
- ヴァイルプラントの實踐經濟學(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、二七七—三〇二頁) 山田雄三

最近經濟文獻

- 獨占價格の理論(經濟學研究、昭和八・三、一一五—一六六頁) 栗村雄吉
- 著積理論の書き改め(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、一七一—一八六頁) 高田保馬
- 經濟配分の問題—On the two principles of "the division and distribution of labour" (Adam Smith)—(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、一〇一—一五〇頁) 大熊信行
- 貨幣の價値の特性(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、二四三—二七六頁) 梅田政勝
- ケインズの貨幣理論(經濟學研究、三卷一號、昭和八・三、一四八頁) 高橋正雄
- 「貨幣中心論」に對する修正の試み(福田徳三博士追憶論文集經濟學研究、一五一—一七一頁) 杉村廣藏
- 資本論は何故商品の分析より始むるか(唯物論研究、七號、昭和八・五、八一—八七頁) 北澤昂
- *Bodin, C.: Economie dirigée, économique scientifique. Paris, 1932.
- *Bratwaite, D. and S. P. Dobbis.: The distribution of consumable goods London, 1932.
- *Conrad, O.: Der Abbau der Preise als Weg zum Gesundung der Wirtschaft. Wien, 1932. 22 S.